HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヨハネ福音書の「歴史的」研究は何を達成したか
Author(s)	佐々木, 啓
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 120, 右45-右74
Issue Date	2006-11-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/16881
Type	bulletin (article)
File Information	CulturalScience120-r2.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ヨハネ福音書の「歴史的」研究は何を達成したか

佐々木　啓

はじめに

先ごろ、待望久しいブルトマン（R. Bultmann, 1884-1976）[一]のヨハネ福音書注解[二]の邦訳[三]が漸く出版され、かつて修士論文を書くために、英訳[四]があるのも知らず（それがあったことを知っていたとしても、今と違って、時間的にも経済的にもすぐにはそれを入手できなかったであろうが）、父の書棚に眠っていたばかりに、あまり読めもしないドイツ語で、それと格闘した日々を懐かしく思い出す。しかし同時に、もしあのころすでにこの翻訳があったならば、いつまでたってもまとまらない私の研究も、もう少しスピードアップできたであろうにと、これから研究に取り組もうとしている若い人たちを羨ましく思う気持ちもわいてくる。

それはともかく、この量的にも質的にも読み解くには相当の力量を要する注解書の翻訳という偉業もさることなが

ら、この邦訳されたブルトマンのヨハネ福音書注解そのものに寄せられた大貫隆の解説における賛辞[五]をはじめ、当該領域の何人かの大家も書き記していた賛辞については、曲がりなりにもヨハネ福音書を研究していると称するものとして、私も大いに首肯できるところである。

文字通り、ヨハネ福音書のみならず、新約聖書にかんする学問的研究の研究史を分ける「分水嶺[六]」としてこの注解書をみなすことは、ヨハネ福音書の研究者のみならず、すこしでも関連領域に携わる者だれにとっても、異存がないところであろう。

ところが、一方で、他ならぬこういった満腔の賛辞を惜しまないアシュトン（J. Ashton, 1931-）は、別なところでは、次のようにも書いている。

「彼ら〔ヨハネ福音書研究者たち〕全てを越えて、ブルトマンは、学識、深さ、理解において比類なく、一人の巨人のごとく屹立しているのである。しかし、彼のその傑出したさまにもかかわらず、彼が提起したまことに重要な諸問題に対する〔彼自身による〕もろもろの解答は、――まちがっている――のである[七]」。

この明快ではあるが、とりようによっては身も蓋もない評言は、何を言おうとしているのだろうか。例によってアシュトンの皮肉な口吻なのではあるが、これをもう少し理解しやすいかたちに捉えなおし、今後の私自身のヨハネ福音書研究のためになんらかの具体的な手がかりをえようと試みることが、本稿の目的である。そのための方法として、ここでは、ヨハネ福音書テキスト原文そのものの細部の立ち入った釈義などをいったん棚上げして、研究史の大きな流れを、私自身の関心に即してたどりなおすことによって、その糸口を見出したい。もとより、その大きな流れも、原典テキスト細部の詮索と不可分である以上、いかほどかは、そういったテキスト細部との結びつきを指摘する場面

があるかもしれない。

本　文

いわゆる「歴史的-批判的〔historical-critical＝historisch-kritisch〕」方法と呼ばれる近代の学問的聖書研究の勃興については、一八世紀のライマールス（H. S. Reimarus, 1694-1768）あたりから論じるのが常道であろう。あるいは、その先駆としてグロティウス（H. Grotius, 1583-1645）やスピノザ（B. Spinoza, 1632-1677）などから説き起こすことも可能であろう。より広い思想史的文脈から見れば、聖書の「歴史的-批判的」研究は、ルネサンスや宗教改革をきっかけとし、啓蒙主義時代にこそその出発点がある、と論じることもできるであろう。(八)

本稿では、ヨハネ福音書研究に焦点をあて、そして、――この点が本稿の眼目なのであるが――その「歴史的」探究の「対象」の変遷、すなわちその「シフト（shift）」(九)、という観点からそれを概観してみたい。

一、記述された出来事の歴史

例えば、出発点として、いま名前をあげたグロティウスの*Annotationes*(一〇)は、ヨハネ福音書について一巻二八八頁を割いて注釈しているが、ヨハネ福音書一一章のラザロの復活の記事について概略次のようなことを述べている。

ラザロの復活は他の三つの福音書には出てこない、つまりこんなに重大な話がヨハネ以外の福音書にないのはおかしいのではないかという疑問に答えて、グロティウスは、それは、福音書記者マタイ、マルコ、ルカが、ラザロやそ

の家族たちを祭司たちの攻撃から守ろうとその話を秘密にしていたからであるとする。そして、ヨハネは、それら三つの福音書が書かれた何年もあとになって、そのような危険がもはや去ったので、その出来事を書くことが出来たのである、[一]と。

また、先に言及したライマールスもドイツ生まれながら、同様の流れに属するとみなされるのだが、イギリスのいわゆる理神論者 Deist らも、次第に成立していく聖書の「歴史的-批判的」研究を方向づける存在だった。その代表的人物の一人ウルストン（Th. Woolston, 1670–1733）なども、ヨハネ福音書二章にあるカナの婚礼の記事、イエスが水をぶどう酒に変える奇跡について、イエスも彼の母も酔っ払っていたのだろう、と言わんばかりであり、イエスが「大酒飲みの仲間のために、…ガリラヤのカナの町全体を酔わせるほどの…大量のぶどう酒を」[二]供した、などという話を文字通り受け取るようなことは、他ならぬイエスの評判を落としかねない、と書いている。

現在なら、いみじくも聖書の「歴史的-批判的」研究と称するものならば、このような説明はしないだろう（しかし、なぜそうしないのだろうか？）。だが、彼らとて決してふざけていたわけではなく、ウルストンなどもむしろ、「キリスト教の真実と発展への愛」[三]に衝き動かされて、こういったある種の合理化を試みているわけである。つまり、実証科学、経験科学といわれ、こんにちも目覚しい発展を遂げている西洋近代科学が成立してくる当時にあって、いかんともしがたく非科学的で非合理的な聖書の記述を何とか合理的に理解しよう、というのが、本文批判（textual criticism＝Textkritik）の作業を除くならば、「歴史的-批判的」聖書研究の第一歩であったと言っていいだろう。この段階で問題になっているのは、ヨハネ福音書に記述された内容の歴史、その事実性、史実性の問題だったのである。

ただ、付け加えておくなら、グロティウスなどは次のようなことにも触れていて、興味深い。これは、ヨハネの手

紙二への導入において、エウセビオス（*Historia Ecclesiastica*, III, xxxix, 6 や VII, xxv, 16）によって（と思われるが）、エフェソにはヨハネの二つの墓があること、（イエスの弟子）ヨハネは異端、特にグノーシス主義に反対するためにこの福音書を書いたのであり、その過程でグノーシス主義の用語を用いていること、ヨハネ福音書の二一章はがんらい福音書の一部だったのではなく、後になってエフェソの教会によって付加されたのだ、など、こんにちまで続く議論にも関連する論点をすでに散見するのである。[一四]

いずれにせよ、共観福音書もさることながら、ラザロの復活にきわまるイエスによるはなはだしく非科学的な奇跡行為の記事を含むヨハネ福音書は、西洋近代科学の興隆にともなって、ある意味で窮地に立たされるわけだが、ここからのシフト（もっとありていに言えば問題のずらし）は、わりあい容易に達成される。すなわちヨハネ福音書のこの種の記述された「内容」の史実性については、いわば学問的には早々に論じられなくなるのである。

しかしその前に、テキストのある種の記述「内容」の事実性と結びつくかたちで、げんにこの福音書を記した著者はだれか、という問題がさまざまに論じられていた。特にこれは、テキストを素直に読めば著者とみなしうる「イエスに愛された弟子」（ヨハネ福音書一三章二三節、二〇章二節など）はだれか、という問いと絡まって、諸説紛々なわけであるが、ざっと列挙すれば、使徒（＝ゼベダイの子、ヤコブの兄弟〔マルコ福音書一章一九節など〕）ヨハネ説（実は、これはヴァレンティノス派が最初に主張したのかもしれない。[一五] しかし、ブラウン〔R. E. Brown, 1966〕[一六]やシュナッケンブルク〔R. Schnackenburg, 1979〕[一七]のような現代の注釈者ですらある程度受け入れている考え）、エフェソの長老ヨハネ説（エウセビオス *H. E.*, III, xxxix, 4 に引用されている失われたパピアス『主の言葉の注解』[一八]を拠りどころとしてハルナック〔A. v. Harnack, 1897〕[一九]やバーナード〔J. H. Bernard, 1928〕[二〇]も支持）、使徒言行録（一五章三七節な

ど）にパウロの助手として登場するヨハネ・マルコ説（ヴェルハウゼン〔J. Wellhausen, 1908〕[二一]、パーカー〔P. Parker, 1960, 1962〕[二二]など）、一部福音書記者ルカ説（ブワスマ〔M. -É. Boismard, 1962〕[二三]）、グノーシス主義者ケリントス説（エウセビオス *H. E.* II, xxv, 6 や VI, xx, 3 などに出て来るローマの司祭ガイウスが唱えた[二四]、あるいはエピファニウス *Panarion*, LI, 2f. によればアロギ〔ロゴス否定〕派が唱えたとヒッポリュトスが言っている）、「驚くほど多くの学者が[二五]主張する（ヨハネ福音書一一章によれば）復活したラザロ説（フレミング〔W. K. Fleming, 1906〕[二六]、フィルソン〔F. V. Filson, 1949〕[二七]、エッカート〔K. A. Eckhardt, 1961〕[二八]、サンダース〔J. N. Sanders, 1968〕[二九]）、ごく最近の説としては、コリントにおけるパウロの宿敵アポロ説（ペトルマン〔S. Pétrement, 1984〕[三〇]）、さらにパウロその人説（ベーコン〔B. W. Bacon, 1910〕[三一]）までもある。

これら当初からある著者をめぐる議論が今でも絶えないのは、基本的に、ラグランジュ（M. -J. Lagrange, 1936）の言うように、「目撃証言者による著作ではなかったと証明されたりすれば、第四福音書はその権威を全て失ってしまうだろう」[三二]といった、いわゆる「真正性〔authenticity〕」が問題とされたからである。こんにちでも「ヨハネ問題」とはこの福音書の「実際の著者問題」であるとする立場が完全になくなったわけではないが[三三]、しかし、注解書などである程度論じなければならない問題であることは確かであるとしても、研究全体の趨勢としては、後述するように、現実の著者の真正性の問題は、むしろ最初の読者の問題、著者そのもというより、最初の現実の読者を中心に据えたこのテキストの歴史的背景の問題へとシフトしているように思われる。

二、福音書の背景や起源という歴史

著者問題と微妙に絡みついたヨハネ福音書テキストの記述「内容」の「事実性」・「史実性」に対する疑問は、たんてきにルカ以外の福音書をまがい物として捨ててしまったユニテリアンのエヴァンソン（E. Evanson, 1792）あたりから激しくなり、それに同調するフォーゲル（Vogel, 1801-4）やホルスト（Horst, 1808）、ブレッチュナイダー（K. G. Bretschneider, 1820）などを経て[二四]、シュトラウス（D. F. Strauss, 1835）[二五]とバウア（F. C. Baur, 1847）[二六]によって止めを刺されることになる。例外はシュライアマッハー（F. D. E. Schleiermacher, 1768-1834）で、ヨハネのイエス像はプラトンやクセノフォンによるソクラテス像より信用できないわけではない、とした[二七]。

こうして徐々に、いわゆる著者の真正性の問題は歴史的信用性の問題からは分離されるようになり、（二〇世紀への）世紀の変わり目頃には、かわってヨハネ福音書の「起源（origin）」というものが論じられるようになる。しかし実は、シュトラウスもバウアも著者問題そのものではなく、この福音書の性格や内容の問題により関心があったのである[二八]。

「著者」から「起源」へのこのシフトの過程において重要な役割を果たしたのが、他でもないドイツ宗教史学派（Religionsgeschichtliche Schule）である。ヨハネ福音書のグノーシス主義との関連を指摘していたミヒャエリス（J. D. Michaelis, 1788）[二九]やヒルゲンフェルト（A. Hilgenfeld, 1849）[四〇]などを先駆けとして、バウアの弟子であり、ドイツ宗教史学派の道備えをしたとされるプフライデラー（O. Pfleiderer, 1887）によって、「歴史的現象としてのキリスト教は、全てのほかの歴史と同一の方法で探究されるべきであり、特にその起源については、当時の宗教的・倫理的生活の多様な要因の通常の結果として研究されるべきなのである」[四一]、という定式化がなされる。こういった宗教史学派の綱要に基づいて、ブッセト（W. Bousset, 1913）はヨハネ福音書とヘルメス文書との関連を探究し（これは、ライツェ

ンシュタイン〔R. Reizenstein, 1861-1931〕の研究などとともに、後のドッド〔C. H. Dodd, 1953〕の研究[四二]につながる)、宗教史学派の路線の延長としてブルトマンは(ヴレーデ〔W. Wrede, 1903〕[四四]、クロイェンビュール〔J. Kreyenbühl, 1900〕[四五]などの先駆的研究の後、リツバルスキー〔M. Lidzbarski, 1925〕によるマンダ教文献『ギンザ』の翻訳[四六]をまって)、マンダ教との関連を提唱したのである(マンダ教文献に触れた最初の注解としてはバウアー〔W. Bauer, 1925〕[四七]のものがある)。

また、同時期、宗教史学派には属さないが、同様に「起源」の探究に促されたものとして、シュラッター(A. Schlatter, 1902)[四八]やウーデベリー(H. Oderberg, 1929)[四九]は、特にユダヤ教ラビ文献とヨハネ福音書との関連を追究した。また、この時期の研究者たちのほとんどはヨハネがパウロに負っていると考えていたという事実を記憶にとどめておいてもいいかもしれない。ハルナック(Harnack, 1886)はヨハネの「パウロ的」キリストという言い方をする[五〇]。ブセットは「ヨハネはパウロの背中に乗っている」と言った[五一]。ヴレーデも「パウロがヨハネ神学の前提であることは確かである」と書いた[五二]。ゴゲル(M. Goguel, 1924)も、「ヨハネの思想がパウロの思想に依存していることは、この福音書をキリスト教の第二世代以前に位置づけられない、ということを示している」[五三]と書いた。

とはいえ、この時期も、「著者」問題が忘れらたわけでなく、くすぶり続けてはいるのだが(ロワジ〔A. Loisy, 1903〕[五四]の他、マイアー〔A. Meyer, 1902〕の報告[五五]、ウェストコット〔B. F. Westcott, 1880〕[五六]、「およそ保守的とは言いがたい」[五七]ベーコン〔B. W. Bacon, 1910〕[五八]すら…)、アシュトンはこれを、古いシャトルコックがボロボロになってもネットをはさんでやりとりされているバドミントンになぞらえている[五九]。しかし大勢は、やはりこの福音書の宗教史的起源の問題と、とりわけこの時期に生じてくるものとして、「テキスト自体の歴史」とでも言うべき、学問的聖書研究における伝

統的な意味でのLiterarkritik＝文献批判的問題へと向かっていった。ここでも徐々にまた、ヨハネ福音書の歴史的研究なるものの、その対象がシフトしていることがうかがえる。

三、ヨハネ福音書というテキストの歴史

「ヨハネの主要な文学的問題は、（シュトラウスが「縫い目のないフロックコート〔jener ungenähte Leibrock〕」と言ったことで有名なほど）注目すべき文体的な統一性と主題的な一貫性が、多くの箇所でのエピソード間の紛れもないつながりの悪さと一緒になっていることである」[六〇]というミークスの指摘をまつまでもなく、ヨハネ福音書テキストのあちこちに見られる文章上のある種のつながりの悪さが、次に論議の的となった。この点で出発点となる重要な業績は言うまでもなくヴェルハウゼン（J. Wellhausen, 1907）[六一]とシュヴァルツ（E. Schwaltz, 1907/1908）[六二]によるものだが、先駆的な同種のアプローチとしては、ヴァイセ（C. H. Weisse, 1856）[六四]のものがある。こうして、キュンメルによると、いわゆる「錯簡 displacement 仮説」は一八七一年までには提唱されることになる[六五]。ストリーター（B. H. Streeter, 1924）[六六]は後に、この仮説について好意的な意見を述べている（バーナード〔J. H. Bernard, 1928〕[六七]や他ならぬブルトマン[六八]もある程度そうである[六九]）。

こうして、現在でも有効ないくつかの文献批判＝資料分析上の装置(仮説)の原型が生み出された。すなわち、ヴェルハウゼン（Welhausen, 1907）[七〇]による「（教会的）編集者」、同じくヴェルハウゼン（同 1908）[七一]やシュピッタ（F. Spitta, 1910）[七二]の「資料〔Grundshrift〕」、（後のブルトマンをを髣髴させる）ゾルタウ（G. C. W. Soltau, 1916）[七三]が唱えた二つの「資料〔Grundschriften〕」、ファウレ（A. Faure, 1922）[七四]が提案した「しるし資料（の元祖）」（ブルトマンの影に隠

れて彼は研究史のなかで正当に評価されていない、とアシュトンはいう[七五]などである。しかし、これらの資料仮説、すなわち現テキストからの資料の再現にかんしては、「錯簡仮説」の方の支持者ストリーターは、「〔そういった〕資料仮説が前提とするなにか大きな拡大、削除、並べ替え、適用などが資料に加えられているならば、そういった手続きを解きほぐせるという言いぐさはグロテスクである。まるでソーセージのつながりから豚を再現しようとするようなものだ」[七六]と揶揄した。これは、少し言葉が過ぎるとすれば、資料批判の適用によってがんらいのテキストに到達できる可能性はないとしながらも、ヨハネ福音書はおそらく複数の手によって書かれただろうということには同意し、しかし、どこにその線を引くかに関しては意見の一致に至るだろうかと悲観的に述べているブッセットの考え[七七]が穏当だろうか。

このような流れの中から冒頭で述べた注解書に結実するブルトマンの研究が現われてくるわけである。しかし、前述のことからブルトマンによるテキストの文献批判 Literarkritik というてんにかんしては、その基本線はすでに出揃っていた、とも言えるのである。「しるし資料」（ファウレ）[七八]しかり、「啓示談話資料」（ゾルタウ）[七九]しかりである。また、ブルトマンのヨハネ福音書解釈の基礎となるグノーシス主義との関係についても、すでに先駆けとなる研究は存在しており（ヴレーデ[八〇]、クロイェンビュール[八一]）、マンダ教への言及もすでに存在していたのである（バウアーの注解書[八二]）。こうしてみるとブルトマンの注解書にきわまるヨハネ福音書研究史は、文字通り、本稿の冒頭で紹介した評言「分水嶺」として、それまでの研究動向を総合した、と言えば聞こえがよいが、材料として特に新たなものがあったわけではない、とも言える。しかし、そんな言い方ではブルトマンの業績を矮小化しすぎなのであり、まさしくそういっ

たさまざまな材料を総合した、その仕方にこそ、ブルトマンの研究が傑出している理由があるのである。それは、「文学的、歴史的、神学的という三種類の問題に対する一貫した矛盾のない答え」を提出している、あるいは、「ドイツ人が言うところのKonsequenz〔徹底性〕」を示している、などと評されるのである。(八三)

しかし、以下の二つの点を確認しておきたい。

ブルトマンは、上記三種の問題、すなわち「文学的、歴史的、神学的」という三種の問題を、分かちがたく結びつけてしまった、ともいえる。ヨハネ福音書に対する彼の大胆な(といっていい)「文献批判」・「資料批判」なくしては、彼のヨハネ福音書解釈はなりたたず、逆に、その解釈がなければその「文献批判」・「資料批判」もない、というかもっとありていに言えば、彼の解釈こそがあのような「文献批判」を必要としたのだ、と言えなくもない。「彼自身ががマンダ教グノーシス主義の中に捜し求めた〔ヨハネ福音書についての〕一つの特殊な説明を要求したのは、〔ヨハネ〕福音書のキリスト論のブルトマン自身による特殊な解釈だったのである」(八四)(解釈学的循環!)。以後、これら三つの問題の複雑な絡まり合いを無視した研究はできなくなった、とも言えるし、この点で、これら三つのうちどれかを無視した探究は、不十分なものに見えてしまうのである。例えば、「資料」の歴史的再構成は、いかにも客観的な作業として、独立して行なえる作業のごとくに見えたとしても、むしろ、この福音書全体の解釈が先立っている(というよりもむしろ――たとえ、おかしな言い方に思えようとも――先立っていなければならない)のである。少なくとも、ブルトマンにおいては、そうだ、と言わざるをえないだろう。あるいは、ブルトマンは、「新約聖書学」というdisciplineがそういった「文学的、歴史的、神学的」という三つの側面の切り離せない作業であることを、はっきりと実は意識的

に示した、と言えるのかもしれない。上記三種の問題をブルトマンがこのように分かちがたく結びつけるにさいして触媒となったものは、おそらくハイデガー（M. Heidegger, 1889–1976）の解釈学的哲学であろう。「二人はそこ〔マールブルク〕で、とりわけヨハネ福音書を一緒に読んでいた」[八五]のである。

強い言い方をすれば、ブルトマン以降、少なくとも客観的な、というより純粋な（あるいは単なる）「歴史的」研究、もっと具体的に言うと、単なる歴史的再構成としての「文献批判」も「資料批判」などというものも、少なくともヨハネ福音書にかんしてはもはやありえない、ということである。

もう一点は、上記の事柄と関連しているのであるが、ブルトマン以前の「歴史的」研究、特に、「歴史的–批判的」聖書研究の草創期において立てられていた「歴史的」問いとは、いかに問いそのものが異なってきているか、あるいはそういった問いの対象がシフトしてしまったか、ということである。これは、それ以前にいくつも設定されてきた問いに正しい答えが見出されたから、事態が急展開したのだろうか。これは、何か真理に向かっての発展・進展なのであろうか。われわれヨハネ福音書研究者たちは、いままで何を行い、いま何を行なっているのだろうか。

このようにして、ブルトマンの注解書は、その後のヨハネ福音書研究の方向を多方面にわたって決定づけるものであったことは間違いない。

ブルトマンの研究に対する直接的な反対は、まず彼の弟子でもあるケーゼマン（E. Käsemann, 1966）[八六]によってなされた。ケーゼマン自身は、自分の関心を「神学的」なものではなく、あくまで「歴史的（historisch）」なものであると位置づけているが[八七]、彼の著作『イエスの最後の意志』のどこが「歴史的」なのか、私にはよく分からない。「終末論」

か「キリスト論」か、前者が後者の「機能」か、あるいはその逆か、[八八] という「機能の神学」（デュポン〔J. Dupont, 1951〕[八九]、クルマン〔O. Cullman, 1959〕[九〇] らも）の議論はその後どのように展開したと言えるのだろうか。[九一] いずれにせよ、ケーゼマンの読み、特にヨハネ福音書一章一四節の読みに追従するものはいない。それを文献批判レベルまでもっていって論じたリヒター（G. Richter, 1971/1972）[九二]、シュネレ（U. Schnelle, 1987）[九三] やデムケ（Demke, 1967）[九四] などは、ヨハネ福音書一章一四～一八節までをいずれにせよ本来のロゴス賛歌にあったものではない、とする。[九五] こういったドイツにおけるヨハネ福音書解釈の論争の延長線上に、例えば、ボルンカム（Bornkam, 1968）[九六]、さらに大貫（1984）の仕事[九七] などが位置づけられる。しかしまた、大貫によるガダマー（H. G. Gadamer, 1975〔1960〕）[九八] の「地平の融合〔Horisontverschmelzung〕」という哲学的解釈学の概念の（「無害といえるかもしれない」が「間違った」とアシュトンが断言している）[九九] 適用にについては、先立って、ムスナー（F. Mußner, 1965）[一〇〇] もやはりそれに依拠しており、さらに大貫によるイエスの出来事と読者（いわゆる「ヨハネ共同体」）の状況とのいわば二重写し[一〇一] という考えにかんしては、レオン＝デュフール（X. Léon-Dufour, 1951 /1952）[一〇二] の「読みの二つの時間 deux temps de lecture」との「顕著な」類似が指摘できる。[一〇三]

四、福音書を担った「共同体」（？）[一〇四] の歴史

こうして、しだいにヨハネの「共同体」なるものがクローズアップされてくることになる。それは、神学的関心から、社会学的関心への移行、と言ってもいいかもしれない。また、ブルトマンの議論においてもう一つの重要な構成要素であった、いわゆる文献批判上の問題、現在のヨハネ福音書の、資料の詮索の方向もまた、やはりこの「共同体」の社会学的問題へと収斂していくこととなる。[一〇五]

フォートナ（R. T. Fortna, 1970）は、資料の探究に一時期「暗黙のモラトリアム」[一〇六]があったとするが、それは、ブルトマンによるヨハネ福音書の章節の入れ替えやそれに連動する資料の再構成が、あまりに複雑だったからであり、そのモラトリアムはブルトマンによる資料仮説の全面的な批判的検討を行なったムーディー・スミス（D. Moody Smith, 1965）[一〇七]の仕事をまって解除されることになる。こういった流れのなかで、ブルトマン自身もある程度支持していたように見えるいわゆる「錯簡仮説」などは徐々に捨てられていき、ヘンヒェン（E. Haenchen, 1980）をして「乱丁理論はすでに過去のものとなった」[一〇八]と言わしめた。しかしまた、以前から、少なくとも写本の証言が始まってからずっと現在の福音書のかたちである以上（もちろん写本上の支持がない七章五八〜八章一二節などは除いて）、「現在の〔ヨハネ福音書の〕順序は、偶然のものではなく、はっきりと誰かによって考えられたものである」として、そのままの形において探究する必要性を主張していたドッド（C. H. Dodd, 1953）のような研究者もいたのである。[一〇九]

「錯簡仮説」や「乱丁理論」は捨てられたとしても、それにかわってフォートナの（けっして正しいという意味ではないが）強力な後押しがあってファウレ⇓ブルトマンとつながる「しるし資料」は、ヨハネ福音書の下敷きとなっている資料として、一部ではすでに定説化していると言えるのかもしれない。しかし、ヨハネ福音書の「資料仮説」には、この福音書全体における文体的特長の統一性を主張する強力な反論（E. Ruckstuhl, 1951）[一一〇]があるし、リンダース（Lindars, 1971）も、「フォートナの再構成された資料テキストでは、彼が〔福音書記者ヨハネ〕の特徴とみなすものを、「何度も何度も」その資料に帰している」[一一一]と批判している。

他方で、二〇世紀の後半になると、いわば「段階的編集仮説（multiple-stage theory）」[一一二]とでも言うべきものが優勢になってくる。この仮説は、ある程度「原資料〔Grundschrift〕」や「諸資料〔source [s]〕」を想定することでは以前

の「文献批判」による「資料仮説」とさして変わらない考えのようにも思えるが、それを記した記者や編集者というよりも、それらの書き手を含めて、福音書を生み出した「共同体」の歴史的状況をも視野に入れたテキストおよびその担い手（たち）の歴史的再構成をめざす、というてんが以前と異なるであろう。[一一三] この説を代表するのが、ブラウン（R. E. Brown, 1970）[一一四] の五段階発展説であるが、同じような議論は、すでにヴィルケンス（W. Wilkens, 1958）[一一五]、さらにリンダース（Lindars, 1971/1972）などにも見られる。[一一六] そしてかなり特異な議論を含むがブワスマ（M. -É. Boismard, 1977）[一一七] もそうである。これらの議論においては（ブワスマは除く）、当然のごとくヨハネの「共同体」[一一八] が問題とされる。つまりヨハネ福音書の段階的、継起的成立過程をテキストの文学的側面から論じる作業が、ヨハネ「共同体」なるものがおかれた歴史的背景の推測と不可分になされるのである。[一一九] しかし、他方では、「資料分析に基づいて共同体の歴史を再構築しようなどという試みは「巨大な」間違いなのである」、[一二〇] といった意見もあることを忘れるわけにはいかない。

その後、ヨハネ福音書の「歴史的」探究は、全体としては、このようなテキストの段階的編集仮説を中心としながら、その「起源」の探究から「背景」の探究へと、やはりその対象の微妙なシフトを呈しているのである。[一二一] こういった傾向は、とりわけミークス（W. Meeks, 1967）[一二二] 以来顕著であり、ビューナー（J. -A. Bühner, 1977）も、「ヨハネ共同体を初期キリスト教史のなかに正確に位置づける」[一二三] ことが重要だ、などと述べている。私見によれば、このようにして、ヨハネ福音書の「歴史的」探究なるものは、今度は徐々に、「読者（集団）」というものを視野に入れ始めてきたのである。

これらの「背景」の探究は、しかし、かつてのブルトマンのように包括的なものではなく、この福音書に見られる個々の「観念」、「モチーフ」といったものを扱ういくぶん限定的なものになったと言えるかもしれない。例えばそれ

は、シュルツ（S. Schulz, 1957）[二二四]の「概念史〔Begriffsgeschichte〕」あるいは「主題史〔Themageschichte〕」という考え、ミークス（W. Meeks, 1972）[二二五]の“ascent/descent”モチーフ、ボルゲン（P. Borgen, 1965）[二二六]の「マナ」のテーマ、ビューナー（J.-A. Bühner, 1977）[二二七]の「神的使い」のテーマなどの探究である。このような研究動向の中で一つの頂点をなす研究が、ヨハネ福音書九章二二節などに見られる「会堂から追い出された＝ἀποσυνάγωγος」という言葉とその意味をめぐるマーティン（J. L. Martyn, 1968）[二二八]のものであり、その流れが現在にまで至っている。

しかし、マーティンの提出したこの語をめぐる解釈もまた、百年前に先駆者のいた考えであり[二二九]、これには強力な反論もある。ロビンソン（J. A. T. Robinson, 1976）[二三〇]のみならず、福音書記者と読者（たち?）が同じ環境から出現したものであり、その環境は本質的にユダヤ教的だ、というマーテインの確信に対して、アシュトン[二三一]と共に、さらに新しい文学批評的観点からしても素朴な疑問が生じる。「内在する読者」と「現実の読者」の分離の必要性はないのか[二三二]。あるいはもっと単純に、そのような同一視は前提とされるべきものではなく、論証されるべきものではないのか。げんに本稿で叙述してきたように、こういったヨハネ福音書の「歴史的」背景にかんしてかつて議論があった（いまも喧しくある）からである。なによりマーティン自身が書いていることを忘れるわけにはいかない。「私は知らない」と三回、ゆっくりと強調して言いながら毎朝起きることが、歴史家にとっては貴重な習慣であろう」[二三三]。

結　論

さて、以上ここまでの研究史の祖述をまとめたい。

これらの「歴史的」研究の対象のシフトは、なぜ起こったのだろうか。流行廃りの問題だ、というのはあまりに極論に過ぎるだろうが、それはより真実へと、何らかの意味でより「歴史的」真実に近づく学問的進展なのだろうか。提出された「歴史的」諸問題は解決されて先に進んで来たのだろうか。アシュトンも「シフト shift」という言葉を用いていることに注意が必要だろう。これは、「歴史的」探究なるものの対象が、シフトして、ずれて来ているのである。しかし、これがたとえずれやシフトだとしても、そこには一つの（必然的？）方向性があることが見えてくるのではないか。それは、私が昨年執筆した論文において述べたこととも実は関連しているように思えるのである。そこに掲げた図1をごらんいただきたい。[一三四] 本稿において、多少の無理は承知で、膨大な研究史を祖述した流れは、その図の左から右へと徐々に進んでいることがわかる。

これまでヨハネ福音書の「歴史的」研究なるものにおいて問われていた対象を、順を追ってたどるならば、最初は、テキストに書かれた出来事そのものの「歴史」性への疑義から始まり、それと連動し、「主に愛された弟子」の「史実性」を媒介とした「現実の著者」の探究も、さまざまな仮説が提出されたまま、進展しているというよりは停滞しているように見える。次に、「歴史的」探究の対象は、テキストの「起源」というものへ、それと並行するかたちで、テキストそのものへ、テキストそのものの「歴史的」成立過程の問いへとシフトした。上述のように、いろいろな意味においてこれらを総合するかたちで成立したブルトマンの注解書以降の研究史において、顕著に問われるようになってきたのは、著者と結びついた「読者（集団）」の姿やその「背景」といった、それまでの問いとは趣を異にした、やはりシフトしている「歴史」の問題なのである。

かくして、この「歴史的」問いのシフトは、カルペッパー（A. Culpepper, 1983）[一三五] などを媒介として、私がその可能

性を追い続けている「新しい文学批評」の基本図式（前掲拙稿図1）[一三六]によるところの「現実の読者」の探究へと接続するのである。ただし、この「現実の読者」は、もはや従来議論されてきたような「ヨハネの共同体」（テキストから想定された最初の現実の読者、しかし実は「内在する読者」）とイコールではない。この「現実の読者」とは、ヨハネ福音書の読み手であるこの私自身、ヨハネ福音書の研究者と称する人々なども含む私たち自身、という意味の「読者」なのである。

注

以下の注における学術雑誌等の略記は、*Theologische Realenzyklopädie* (Berlin・New York: Walter de Gruyter, 1976), Abkürzungsverzeichnis (zusammengestellt von Siegfried Schwertner)による。

（一）以下、同様の研究者たちの名前の原語表記を記した括弧内の数字は、生没年、あるいは関連する文献の出版年である。

（二）Rudolf Bultmann, *Das Evangelium des Johannes* (Kritisch-exegetischer Kommentar über das Neue Testament begründet von H. A. W. Meyer)(Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1941).

（三）R・ブルトマン『ヨハネの福音書』（杉原助訳）日本キリスト教団出版局、二〇〇五年。本訳書は前注二の初版にもとづくとされるが、現在このブルトマンの注解書は、一九八六年の第二一版まで版を重ねており、一九五七年第一五版以降付加されている増補・改訂等を記した付録の冊子の記述も、本訳書には取り入れられている（杉原訳『ヨハネの福音書』四一頁参照）。

（四）R. Bultmann, Translated by G. R. Beasley-Murray, R. W. N. Hoare and J. K. Riches (General Editors), *The Gospel of John: A Commentary*, (Oxford: Basil Blackwell, 1971). まったく余談であるが、修士論文を書き上げて何年もたってから手にしたこの英訳は、あらためて交換してもらうのもめんどうなほどの落丁本であった。

（五）杉原訳『ヨハネの福音書』、三–三九頁。

（六）杉原訳『ヨハネの福音書』、四頁、大貫の「解説」中の言葉であるが、J. Ashton, *Understanding the Fourth Gospel* (Oxford: Clarendon Press, 1991), p. 8 にもすでに "watershed" という言葉が見られる。

（七）Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 45.（〔　〕内は佐々木による補い、ダッシュによる強調はアシュトン自身による。）

（八）新約聖書にかんする「歴史的-批判的」研究の歴史を概観する最近の著作として W. Baird, *History of New Testament Research*, Vol. 1 (From Deism to Tübingen) and Vol. 2 (From Jonathan Edwards to Rudolf Bultmann), (Minneapolis: Fortress Press, 1992 a. 2003)が有益である。聖書の「歴史的-批判的」研究の始まりには、啓蒙主義の合理的精神があるわけだが、そのいまひとつの源泉として、一七世紀の終わりから一八世紀はじめにかけてのいわゆるドイツ「敬虔主義」も重要な要因である（Baird, *History of New Testament Research*, Vol. 1, pp. 58-90 などを参照）。

（九）Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, pp. 17, 19, etc. アシュトンは、こういった「シフト」にさしたる重要性を認めていないようにも思えるのだが（特に *ibid.*, p. 19）、わたしにはそう思われない。まさしくこの「シフト」が持つ意味について、深く考えをめぐらしてみる必要があるだろう。

（一〇）H. Grotius, *Annotationes in Novum Testamentum* (2d rev. ed. 9 vols., plus index volume) (Groningen: W. Zuidema, 1826 [ca. 1640]).

（一一）Baird, *History of New Testament Research*, Vol. 1, pp. 11 による。

（一二）Th. Woolston, *Six Discourses on the Miracles of Our Saviour and Defences of His Discourses, 1727-1730* (British Philosophers and Theologians of the Seventeenth and Eighteenth Centuries) (New York and London: Garland, 1797), Discourse 4, p. 39. ただし、ここでは Baird, *History of New Testament Research*, Vol. 1, p. 47 による。

（一三）Woolston, *Six Discourses on the Miracles of Our Saviour and Defences of His Discourses, 1727-1730*, Discourse 6, p. 71. ただし、ここでは Baird, *History of New Testament Research*, Vol. 1, p. 48 による。

（一四）Grotius, *Annotationes* を解説した Baird, *History of New Testament Research*, Vol. 1, pp. 8-10 による。

（一五）B. Lindars, *The Gospel of John* (The New Century Bible Commentary), (Grand Rapid. Mich.: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1972), p. 28.

（一六） R. E. Brown, *The Gospel According to John* (The Anchor Bible 29-29A) (New York/London/Toronto/Sydney/Auckland: Doubleday, 1966a. 1970), Vol I, lxxxvii-xcii.

（一七） R. Schnackenburg, *Das Johannesevangelium,* 1. T. - 3. T. u. Ergänzende Auslegungen und Exkurse (Herders theologischer Kommentar zum Neuen Testament) (Freiburg/Basel/Wien: Herder, 1979-1984), 1. T., S. 60-88.

（一八） A. v. Harnack, *Geschichte der altchristlichen Litteratur bis Eusebius*, II/1, (Leipzig: J. C. Hinrichs, 1897), S. 674 Anm. 10.

（一九） J. H. Bernard, *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to St. John,* 2 vols. (The International Critical Commentary) (Edinburgh: T. & T. Clark, 1976 a. 1972 [1928]), Vol. I, lxx.

（二〇） 廃れかけたようにも見えたこの説をあらためて支持する著書を、最近ヘンゲルがものした。M. Hengel, *Die Johanneische Frage* (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1993). しかし、地理的にヨハネ福音書をエフェソに結びつけるような伝承について、「ヨハネ解釈の歴史において奇妙でほとんど滑稽な特徴である」と、ケーゼマンは文字通り一笑に付していた（E. Käsemann, *Jesu letzer Wille nach Johannes 17* [Tübingen: J. C. B. Mohr, 1980[4] [1966]], S. 131. 善野碩之助・大貫隆訳『イエスの最後の意志―ヨハネ福音書とグノーシス主義』ヨルダン社、一九七八年、一五二頁）。また、大貫隆は、ヘンゲルの考えを「底の浅い保守性」と一蹴した。

（二一） J. Wellhausen, *Das Evangelium Johannis*, (Berlin: Georg Reimer, 1908), S. 119f.

（二二） P. Parker, “John and John Mark,” *JBL* 79 (1960), pp. 97-110. idem, “John the Son of Zebedee and the Fourth Gospel,” *JBL* 81 (1962), pp. 35-43.

（二三） M. -É. Boismard, «Saint Luc et la rédaction de quatrième évangile (Jn 4: 46-54),» *RB* 69 (1962), 185-211.

（二四） Ashton, *Understanding the Fourth Gospel,* p. 5 n. 4 などではそうとされているが、エウセビオスの該当箇所にそういった記述は見当たらない。

（二五） *ibid.*, n. 5.

（二六） W. K. Fleming, “The Authorship of the Fourth Gospel,” *The Gardian*, 19th Dec., 1906, p. 2118.

（二七） F. V. Filson, “Who was the Beloved Disciple?,” *JBL* 68 (1949), pp. 83-88.

（二八） K. A. Eckhardt, *Der Tod des Johannes als Schlüssel zum Verständnis der johanneischen Schriften* (Berlin: Walter de

Gruyter, 1961).

(二九) J. N. Sanders, *The Gospel according to Saint John*, ed. B. A. Mastin (Harper's NT Commentaries) (New York: Harper & Row, 1968).

(三〇) S. Pétrement, *Le Dieu séparé: Les origines du gnosticisme* (Paris: Cerf, 1984).

(三一) B. W. Bacon, *The Fourth Gospel in Research and Debate* (A Series of Essays on Problems Concerning the Origin and Value of the Anonymous Writings Attributed to the Apostle John), (New York: Moffat, Yard & Co., 1910).

(三二) M. -J. Lagrange, *Évangile selon* Saint Jean (Études bibliques), (Paris: Librairie V. Lecoffre; J. Gabalda, 1936[5]), xi.

(三三) 例えば、K. H. Rengstorf (ed.), *Johannes und sein Evangelium* (Wege der Forschung, 82) (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1973), xiv.

(三四) これらの人名の記述はAshton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 15による。エヴァンソンとブレッチュナイダーの著書にかんしては、以下の書誌が記されている。E. Evanson, *The Dissonance of four generally received evangelists and the Evidence of their respective authority examined* (Ipswiich, 1792). K. G. Bretschneider, *Probabilia de evangelii et epistularum Joannis, apostoli, indole et origine* (Leipzig, 1820).

(三五) D. F. Strauss, *Das Leben Jesu kritisch bearbeitet* (Tübingen: Osiander, 1935/6).

(三六) F. C. Baur, *Kritische Untersuchungen über die kanonischen Evangelien: Ihr Verhältniß zu einander, ihren Character und Ursprung* (Hildesheim: Georg Olms, 1999［Tübingen, 1847］).

(三七) Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, pp. 16f. による。

(三八) シュトラウスにおいては「神話〔Myth〕」、バウアにおいては「理念〔Idea〕」という語が、ヨハネ福音書の内容を論じるさいの鍵となろう。アシュトンは、ヨハネ福音書の学問的研究において、「歴史」に対置される概念が、これらの「神話」、「理念」などから、さらに「哲学」、「寓話〔allegory〕」、「神秘主義〔mysticism〕」、「意味〔meaning〕」、そして最後に「神学〔theology〕」などと転換してきたことを指摘している（Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 36）。こういった転換の意味を探ってみることも重要であると思われるが、それについては稿を改めて論じたい。

(三九) W. G. Kümmel, *The New Testament: The History of the Investigation of its Problem* (New York/Nashville: Abingdon Press, 1972), p. 69 による。

(四〇) A. Hilgenfeld, *Das Evangelium und die Briefe Johannes nach ihre Lehrbegriff dargestellt* (Halle: Schwetschke, 1849).

(四一) Kümmel, *The New Testament: The History of the Investigation of its Problem*, p. 210. これは O. Pfleiderer, *Das Urchristentum, seine Schriften und Lehre, in geschichtlichen Zusammenhang beschrieben* (Berlin: Reimer, 1902 [1887]) からの引用。

(四二) W. Bousset, *Kyrios Christos: Geschichte des Christusglaubens von den Anfängen des Christentums bis Irenaeus* (Göttingen: Vandenhoek & Ruprecht, 1967[6] [1913]).

(四三) C. H. Dodd, *The Interpretation of the Fourth Gospel* (Cambridge et. al.: Cambridge University Press, 1953).

(四四) W. Wrede, *Character und Tendenz des Johannesevangeliums* (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1903).

(四五) Ashton, *Understanding the Fourth Gospel,* p. 27 による。

(四六) *GINZA: Der Schatz order das große Buch der Mandäer* (übersetzt und erklärt von Mark Lidzbarski) (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1925).

(四七) W. Bauer, *Das Johannesevangelium erklärt* (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1933[3]). この注解書の第二版（一九二五年）でマンダ教文献について触れている。初版は一九一二年。

(四八) A. Schlatter, *Die Sprache und Heimat des vierten Evangelisten* (Gütersloh: C. Bertelsmann, 1902) これは K. H. Rengstorf (ed.), *Johannes und sein Evangelium*, pp. 28-201 に再録されている。

(四九) H. Odeberg, *The Fourth Gospel: Interpreted in its relation to contemporaneous religious currents in Palestine and the Hellenistic-Oriental world* (Uppsala: Almquist & Wiksell, 1929).

(五〇) A. v. Harnack, *Lehrbuch der Dogmengeschichte* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1964[4] [1886]), Bd. I, S. 108.

(五一) W. Bousset, „Johannesevangelium," *RGG* (1912[1]), Bd. III, cols. 608-636. idem, *Kyrios Christos*, S. 180.

(五二) W. Wrede, "The Task and Methods of 'New Testament Theology'," *The Nature of New Testament Theology,* ed. R. Morgan (Naperville, IL: Alec R. Allenson, 1973), p. 88 n. 38.

(五三) M. Goguel, *Introduction au Nouveau Testament*: (Tome II) *Le Quatrième Évangile* (Paris: Ernest Leroux, 1924), pp. 73ff. ヨハネ福音書に対するパウロの影響を主張するものとして、次の文献も参照。J. Moffat, An *Introduction to the Literature of the New Testament* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1927［1911］). A. E. Barnett, *Paul Becomes a Literary Influence* (Chicago: University Chicago Press, 1941). しかし、こんにちの研究状況において、ヨハネ福音書に対するパウロの影響という観点は、ほとんど主題的に論じられないように思われる。

(五四) A. Loisy, *Le Quatrième Évangile* (Paris: Emil Nourry, 1902).

(五五) A. Meyer, „Johanneische Literatur," *ThR* 5 (1902), S. 316-333.

(五六) B. F. Westcott, *The Gospel according to St. John* (London: John Murray, 1882²)第一版は一八八〇年。

(五七) Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 18.

(五八) Bacon, *The Fourth Gospel in Research and Debat: A Series of Essays on Problems Concerning the Origin and Value of the Anonymous Writings Attributed to the Apostle John* (New Haven: Yale University Press, 1918［1910］).

(五九) Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 18 n. 24. しかし、これはヨハネ福音書テキストの特性と関連があるのではないか。マタイ、マルコ、また、著者が一人称のみで登場するルカとも異なって、ヨハネでは、福音書テキストそのものの「真正性」という問題を、そのテキストそれ自体（の複雑な、というか錯綜した人称構造）が提起する、と考えられるからである（拙稿「ヨハネ福音書における読者の問題」『北海道大学文学研究科紀要』一一七、二〇〇五年、一-三〇頁、参照）。さらにまた、ヨハネ福音書テキストの人称の問題とアシュトンのいうヨハネ福音書テキストの「自己言及」性とは関係があると思われる。たとえば、テキスト世界の人称世界に巻き込まれることによって、同時にまた、「福音書」というジャンルそのものについて考えをめぐらすように仕向けられるのではないか。

(六〇) W. A. Meeks, "The Man from Heaven in Johannine Sectarianism," *JBL* 85 (1966), pp. 159-169. しかし、この段階でもまだ、著者問題はくすぶり続ける。ホフマン（G. Hoffmann, *Das Johannesevangelium als ein Altersuerk: Eine psychologische Studie*［Gütersloh: Evangelischer Verlag, 1933］）は、この接続の悪さや断絶を著者の老齢によるただどしさと考え（書名に注目）、ルナン（J. E. Renan, 1823-1892）はヨハネの「老人の虚栄」ということを言って、結局彼は頭が弱くなっていたのかもしれない、という

(J. E. Renan, *Histoire des origines du Christianisme* [Vol. V, Les Évangiles] [Paris: Calmann Levy, 1877²], pp. 429f.)。

(六一) J. Wellhausen, *Erweiterungen und Änderungen im vierten Evangelium* (Berlin: Georg Reimer, 1907).

(六二) E. Schwartz, „Aporien im vierten Evangelium," *Nachrichten von der Königlichen Gesellschaft der Wissenschaft zu Göttingen: Philologisch-historische Klasse* (1907), S. 342–372; (1908), S. 115–148; 149–188; 497–650.

(六三) このような伝統的「文献批判」の作業・仮説の背後には、「この〔ヨハネ福音書〕の困った要素をうまく取り除き、そうして、パスカルが言うところの「幾何学の精神」をもっぱら働かせる妨げになるようなものによって汚されていない精妙な教えを残そうとする」ドイツ的合理主義がある、とアシュトンは言う (Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 29 n. 62)。

(六四) C. H. Weisse, *Die evangelische Geschichte kritisch und philosophisch bearbeitet* (Leipzig: Breitkopf und Hartel, 1838). ちなみに、本文におけるミークスの引用文中に出てくるシュトラウスの表現は、物語部分を談話部分から切り離して、後の付加だとしたこのヴァイセの著作への反論であった。こういった「分割主義者」のさらなる先駆けとしては、エッカーマン (J. C. Eckerman, 1796) などがいると、シュルツは指摘する (S. Schulz, *Untersuchungen zur Menschensohn-Christologie im Johannesevangelium, zugleich ein Beitrag zur Methodengeschichte der Auslegung des 4. Evangeliums* (Göttingen: Vandenhoech & Ruprecht, 1957).

(六五) Kümmel, *Introduction to the New Testament* (revised edn.) (London: SCM Press, 1975), p. 198. 「錯簡仮説」とは、簡単に言えば、ヨハネ福音書の話のつながりが悪いのは（例えば、ヨハネ福音書一四章三一節で、イエスが部屋から出て行くことを勧めているのに、一五章に入ってもイエスの談話が続くこと、など）、福音書成立の早い段階において、パピルスの頁が何らかの理由によりごちゃごちゃになってしまったからだ、という考えである。

(六六) B. H. Streeter, *The Four Gospels: A Study in Origins* (London: Macmillan & Co., 1936⁵). 本書の初版が一九二四年出版である。

(六七) J. H. Bernard, *The Gospel according to St. John*, Vol. I, xvi–xxx.

(六八) Bultmann, *Das Evangelium des Johannes*, S. 348–351.

(六九) しかし、ルナンは別の意見で、ヨハネ福音書を「イエスがどのように話したかを知るものとするならば価値はないが、事実の順序を知ることが問題だとすれば、共観福音書よりも価値がある」、と考える (Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 28 n. 59)。

(七〇) J. Wellhausen, *Erweiterungen und Änderungen im vierten Evangelium.* ただし、「教会的編集〔die kirchliche Reduction〕」というのはブルトマンの用語である。Bultmann, *Das Evangelium des Johannes* の当該箇所を参照。

(七一) Wellhausen, *Das Evangelium Johannis.*

(七二) F. Spitta, *Das Johannes-Evangelium als Quelle der Geschichte Jesu* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1910).

(七三) G. C. W. Soltau, *Das vierte Evangelium in seiner Entstehungsgeschichte dargelegt* (Heiderberg: Carl Winters Universitatsbuchhandlung, 1916). ブルトマンが提唱した、ヨハネ福音書の背後にある二つの資料とは、「啓示談話〔Offenbarungsreden〕資料」と「しるし資料〔*σημεῖα*=Quelle〕」である。Bultmann, *Das Evangelium des Johannes* の当該箇所を参照。

(七四) A. Faure, „Die alttestamentlichen Zitate im vierten Evangelium und die Quellenscheidungshypothese," *ZNW* 21 (1922), S. 99–121.

(七五) Ashton, *Understanding the Fourth Gospel,* p. 35.

(七六) Streeter, *The Four Gospels,* p. 377.

(七七) Bousset, „Johannesevangelium," *RGG* (1912[1]), Bd. III, col. 618.

(七八) 注七四参照。

(七九) 注七三参照。

(八〇) 注四四参照。

(八一) 注四五参照。

(八二) 注四七参照。

(八三) Ashton, *Understanding the Fourth Gospel,* p. 45.

(八四) *ibid.,* p. 66.

(八五) M. Lill, *Zeitlichkeit und Offenbarung: Ein Vergleich von Martin Heideggers »Sein und Zeit« mit Rudolf Bultmanns »Das Evangelium des Johannes,«* (Frankfurt am Main/Berlin/New York/Paris: Perter Lang, 1987), p. 5. ブルトマンのヨハネ福音書研究、ひいては二〇世紀以降のヨハネ福音書研究を論じる場合には、このブルトマンとハイデガーの（思想的）関係は詳細に検討され

るべき問題だと思われる。

(八六) Käsemann, *Jesu letzter Wille nach Johannes 17*.

(八七) *ibid.*, S. 15. 善野他訳二四頁。

(八八) Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, pp. 69f.

(八九) J. Dupont, *Essais sur la christologie de Saint Jean* (Bruges: l'Abbaye de Saint-André, 1951).

(九〇) O. Cullmann, *Die Christologie des Neuen Testaments* (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1957).

(九一) Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, pp. 69f.

(九二) G. Richter, „Fleischwerdung des Logos im Johannesevangelium," *NT* 13 (1971), pp. 81–126; 14 (1972), pp. 257–276.

(九三) U. Schnelle, *Antidoketische Christologie im Johannesevangelium: Eine Untersuchung zur Stellung des vierten Evangeliums in der johanneischen Schule* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987).

(九四) C. Demke, „Der sogenannte Logos-Hymnus im johanneischen Prolog," *ZNW* 58 (1967), S. 45–68.

(九五) ケーゼマンによって仕掛けられたこのヨハネ福音書「プロローグ」(ヨハネ福音書一章一～一八節)をめぐる解釈論争から発展した文献批判・資料批判的議論は、限りなく錯綜してしまったままである。なんとかそういった議論を概観するには、次の文献を参照。M. Theobald, *Die Fleischwerdung des Logos* (Münster: Aschendorff, 1988). 概観すると言っても、本書は五四〇頁ちかくもある。

(九六) G. Bornkamm, "Towards the Interpretation of John's Gospel: A Discussion of The Testament of Jesus by Ernest Käsemann," *EvTh* 28 (1968), S. 8–25.

(九七) T. Onuki, *Gemeinde und Welt im Johannesevangelium: Ein Beitrag zur Frage nach der theologischen und pragmatischen Funktion des johanneischen »Dualismus«*, (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1984).

(九八) H.-G. Gadamer, *Wahrheit und Methode* (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1975⁴).

(九九) Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 432.

(一〇〇) F. Mußner, *Die johanneische Sehweise und die Frage nach dem historischen Jesus* (Freiburg/Basel/Wien: Helder, 1965).

(一〇一) しかし、これらの議論で論じられる「共同体」=「読者」には、この私自身を含むこんにちの「現実の読者」が含まれていない

ことに注意がいる。例えば、大貫隆『世の光イエス』（福音書のイエス・キリスト④ヨハネによる福音書）講談社、一九八四年、一七七-一七八頁の「「わたしたち」とは誰か?」を参照。

（一〇二） X. Léon-Dufour, «Le Signe du Temple selon Saint Jean,» *RSR* 39 (1951/1952), pp. 155–175.

（一〇三） Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 76. ただしOnuki, *Gemeinde und Welt im Johannesevangelium* の文献表にはレオン=デュフールの名はない。他方、レオン=デュフールは、大貫の著作を好意的に評価している（*RSR* 73 (1985), pp. 253–256における大貫の著作に対する書評を参照）。

（一〇四） 便宜上「共同体」とするが、アシュトンなども無造作に“Johannine school”（*Understanding the Fourth Gospel*, p. 82）、“Johannine community”（*ibid.*, p. 86）、“groop”（*ibid.*）などの語を用いているのが気になる。まさしく、この「共同体」の性格をめぐっても、いろいろ議論があるからである。例えば、ヘンゲルならば「学派［Schule=School］」という呼称にこだわる（Hengel, *Die Johanneische Frage*, S. 12f. など随所。）。

（一〇五） Bultmann の注解書における「実存論的」ヨハネ福音書解釈は、いわば個人主義的であり、こういった「社会学」的関心が欠けていたと指摘することもできよう（Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 101）。

（一〇六） R. T. Fortna, *The Gospel of Signs: A Reconstruction of the Narrative Source Underlying the Fourth Gospel* (Cambridge: Cambridge University Press, 1970), p. 1 n. 1.

（一〇七） D. Moody Smith, *The Composition and Order of the Fourth Gospel* (New Haven/London: Yale University Press, 1965).

（一〇八） E. Haenchen, *Das Johannesevangelium: Ein Kommentar* (aus den nachgelassenen Manuskripten herausgegeben von U. Busse) (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1980), S. 48–57.

（一〇九） Dodd, *Interpretation*, pp. 289f. そこでのドッドの議論はここでは詳述できないが、現在あるテキストの統一性を、むしろ前提として出発しようとするいわゆる「新しい文学批評」の方法を補強する論点になるかもしれない。注五九で言及した拙稿「ヨハネ福音書における読者の問題」参照。

（一一〇） E. Ruckstuhl, *Die literarische Einheit des Johnnesevangeliums: Die gegenwärtige Stand der einschlägigen Forschungen* (Schweiz: Universitätsverlag Freiburg/Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1987 [1951]).

（一一一） B. Lindars, *Behind the Fourth Gospel* (London: SPCK, 1971).

（一一二） Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 81.

（一一三） *ibid*., pp. 82f.

（一一四） Brown, *The Gospel According to John*, vol. I, xxxiv–xxxix. この「五段階」を略述すれば、以下の通りである。（一）共観福音書型のイエスの言葉と行ないにかんする伝承、（二）そういった伝承の、九章に代表されるような、少なくとも数十年にわたるヨハネ的パターンでの発展、（三）そういった伝承素材をひと続きの著作へと仕上げたヨハネ福音書のいわば第一版の成立、（四）その著作の改訂作業（ブラウンは福音書記者が何度か改訂したと考えている）、（五）福音書記者とは別人の編集者と呼ぶべき者の手による最終的編集作業。この「編集者〔redactor〕」は、福音書記者と同じ「学派〔school〕」に属するごく近しい者、あるいは「弟子〔disciple〕」だという。

（一一五） W. Wilkens, *Die Entstehungsgeschichte des vierten Evangeliums* (Zollikon: Evangelischer Verlag, 1958). ただし、二一章などを除いて、基本的には一人の目撃証言による改訂とする。

（一一六） Lindars, *Behind the Fourth Gospel*, pp. 27–60. さらに、idem, *The Gospel of John*, pp. 46–54.

（一一七） M.-É. Boismard et A. Lamouille, *Synopse des quatre évangiles en français*, III. *L'Évangile de Jean* (Paris: Cerf, 1977).「特異」というのは、同一著者の別版や原福音書とでもいうべき下書きの存在を仮定したり、一部著者ルカ説、などを唱えるてんである。

（一一八） 注一〇四参照。

（一一九） しかし、これは「当然」ではない。本文の六〇頁に記したマーティンの考えに対するアシュトンの言及、また、注一三四でふれている拙稿の図1を見よ。

（一二〇） ヴィルッケンス（U. Wilckens）によるリヒター（G. Richter）の論文集に対する書評（*TLZ* 106 [1981], S. 815–817）における評言。

（一二一） Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 93.

（一二二） W. Meeks, *The Prophet-King: Moses Traditions and the Johannine Christology* (Leiden: E. J. Brill, 1967).

（一二三） J.-A. Bühner, *Der Gesandte und sein Weg im vierten Evangelium: Die kultur- und religionsgeschichtliche Grundlagen der*

johanneischen Sendungschristologie sowie ihre traditionsgeschichtliche Entwicklung (Tübingen: J. C. B. Mohr, 1977), S. 1.

（一二四） S. Schulz, *Untersuchungen zur Menschensohn-Christologie im Johannesevangelium, zugleich ein Beitrag zur Methodengeschichte der Auslegung des 4. Evangeliums* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1957).

（一二五） W. A. Meeks, "The Man from Heaven in Joannine Sectarianism," *JBL* 91 (1972), pp. 44–72. この「（魂の）上昇／下降」という宗教史的モチーフの探究にかんして、いまのところこのヨハネ福音書研究とは直接切り結ばないが、私のいまひとつの研究対象である宗教学者（I. P. Culianu, 1950–1991）によるこのモチーフの宗教史的探究との関連が興味深い（拙稿「I・P・クリアーノの他世界（other world）探究 ── クリアーノ宗教学の原点と方法 ──」クリアーノ研究会編『クリアーノ研究』創刊号〔近刊予定〕〔インターネット上でのみの公開 http://sapporo.cool.ne.jp/hokusyu/〕）。

（一二六） P. Borgen, *Bread from Heaven: An Exegetical Study of the Concept of Manna in the Gospel of John and the Writing of Philo* (Leiden: E. J. Brill, 1965).

（一二七） J.-A. Bühner, *Der Gesandte und sein Weg im vierten Evangelium.*

（一二八） J. L. Martyn, *History and Theology in the Fourth Gospel* (Nashville: Abingdon Press, 1979² [1968]).

（一二九） M. von Aberle, „Über den Zweck des Johannesevangelium," *Theologische Quartalschrift*, 42 (1861), S. 37–94. さらに、より最近のマーティン説の先駆けとして、次も参照。K. L. Carroll, "The Fourth Gospel and the Exclusion of Christians from Synagogues," *BJRL* 40 (1957/1958), pp. 19–32.

（一三〇） J. A. T. Robinson, *Redating the New Testament* (London: SCM, 1976).

（一三一） アシュトン（Ashton, *Understanding the Fourth Gospel*, p. 107）は、K. Bornhäuser, *Das Johannesevangelium: Eine Missionsschrift für Israel* (Gütersloh: C. Bertelsmann, 1928) などに言及しつつ、ヨハネ福音書テキストにおける「ユダヤ人たち Ἰουδαῖοι」という言葉の用法の違いを吟味する必要性を指摘して、マーティンの前提に疑問を呈するのである。

（一三二） 注一三四参照。

（一三三） J. L. Martyn, *The Gospel of John in Christian History* (New York/Ramsey/Tronto: Paulist Press, 1978), p. 92.

（一三四） 注五九で言及した拙稿「ヨハネ福音書における読者の問題」、八頁参照。

（一三五）　R. A. Culpepper, *Anatomy of the Fourth Gospel: A Study in Literary Design* (Philadelphia: Fortress Press, 1983).

（一三六）　注一三四参照。

新約原典テキスト

Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece* (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2006[27]).

二〇〇六年八月